



## 私たちの研究室

# 金澤 淳子 研究室

教養教育研究院  
葛飾キャンパス教養部 准教授  
かなざわ じゅんこ  
金澤 淳子 先生



2023年夏に、アマストの国際学会に参加した折に撮影したディキンソンの部屋

## 文学・文化を通し、分野を横断しながら 自分なりの「問い」を探ってほしい

東京理科大学は理系、科学系の大学だが、学生の教養教育にも力を入れているところに特色がある。外国語教育にとどまらず、幅広い分野の教養が身につけられるよう、広範囲な分野の専門家を揃えている。

### エミリ・ディキンソンの詩に魅せられて

そんな中でも、19世紀アメリカの女性詩人であるエミリ・ディキンソンに出会い、長くその研究を続けているのが金澤淳子先生である。

ディキンソンはアメリカを代表する詩人だ。南北戦争勃発前の不穏な時期に、詩人への道を歩み始めている。ダーウィンが進化論を発表し、それまでの通念を覆す科学の発見が次々となされ、ひとびとの世界観や宗教観が大きく揺らいだ時代だ。

ディキンソンはマサチューセッツ州の大学町アマストの名家に生まれた。父は弁護士や政治家として活躍し、アマストへの鉄道開通にも尽力している。ディキンソン家には大学の教員や学生たち、町の名士たち、著名な作家やジャーナリストたちが集った。

「若いころの書簡を読むと、友人たちに囲まれ、自由闊達な娘時代を送っていた様子が窺えます。また、愛犬を伴い、近隣もかなり散策しています。しかし次第にひとと会うことを避け、家から出ることが少なくなります。戦争前後の動乱の時代、自分自身の生き方を見つめ、自由な精神の在り処を模索するようになっていったのではないのでしょうか。28歳頃から詩人としての意識を持ち始めるのです」と金澤先生は話す。

金澤先生は大学で最初はイギリス文学に興味を持っていたが、3年の時にディキンソンの詩に出会ってからはアメリカ文学専攻を決める。夜遅く、大学の門が閉まるまで読書会に浸るような生活が続いたという。

「その後もいくつかの読書会に恵まれました。詩の読みをじっくりと時間をかけて指導してもらった読書会、アメリカ文学の作品を同級生たちと読んだ読書会、先生の許に何人かで集まって読んだ読書会など様々ありました。精読を通して作品に真摯に向き合うことの大切さ、文学研究の基本を学びました」と話す。

「ディキンソンの詩は切り詰められた硬質な言葉で書かれています。無駄を削ぎ、研ぎ澄まされた表現は、かなり断片的です。省略された空白部分をどう解釈するかは読者に委ねられています。絶対的な正解はない。そこが難しくもあり、魅力でもあります。ディキンソンの詩には「魂」「自然」「死」「永遠」といった主題があります。冬の日に斜めに射す一条の光を目にして、はっと胸を突かれるような瞬間を捕らえた一行など、こちらの虚を突くような、その鋭い言葉に魅かれます。

彼女が55歳で亡くなり、妹が彼女の部屋から膨大な数の詩を発見したのです。その後、詩集が刊行され、評判となり、広く知られるようになりました」と、ディキンソンの魅力などを話してくれた。

この夏、久しぶりにアマスト大学で対面の国際学会が開催され、金澤先生も研究発表をした。「様々な国から大勢の研究者が集まりました。ディキンソンが散歩したと思われる牧草地や雑木林の道を、みんなで喋りしながら歩き、楽しい思い出になりました」。

## 英語圏の文学・文化を読み解く学習

金澤先生の大学での授業を少し見てみよう。

先生の手元に、アメリカの風景画をめぐる英語論文集がある。大学院での講座「英語圏文学・文化演習」の教材として使用されたものだ。

示された1枚の絵は、画面右上奥にはアメリカの新時代の象徴となった汽車が走り、その手前ではアメリカの大地がどんどん開墾されている。開拓者側から見れば、活気にあふれた風景である。しかし、その左下にはそれを静かに見つめるネイティブアメリカンの姿が描かれているというものだ。

木陰に描かれているため、彼の存在は風景に埋没してしまいがちだが、彼の目から見れば、移住者が入ってきて、自分たちの土地を奪い、大きく変えつつある風景なのである。

19世紀アメリカでは風景画が流行し、旅行が大変なブームになったというが、それはなぜだったのか。そんなテーマを歴史・社会・環境・文学・文化など異なる分野を横断する学際的な視座から考えてもらう。

「英語論文を通して1枚の風景画を読み解き、細部に深い意図があること、背後の時代や社会の影にも気づき、それを引き出すことの意味を考えようというものです。そして19世紀の風景画が、21世紀の「今」にも繋がっていることも意識して欲しいのです」。

また、学部生向けの「教養フォーラム（文化と思想）」では、3人の講師が「身体、美、表象」のテーマで授業を行いながら共同開講している。

金澤先生はそのうちの「表象」を主に受け持ち、その中の1コマで「植物は声を持つのか」というタイトルで講義を行った。植物の意識に関する研究は19世紀にダーウィンも携わっており、それを文学作品にも結び付けて考察する内容だ。そのなかで2020年ノーベル文学賞を受賞したアメリカ詩人のルイーザ・グリュックの「The Wild Iris（野性のアイリス）」も題材に取り上げている。

「詩集では庭の植物たちと、神と、庭仕事をしている詩人の3者の言葉からなる54篇の詩が並びます。特に、表題にもなったアイリスやユリなど庭の植物たちの『声なき声』に焦点を当てて、掬いあげているところに深い意味があると思うのです。聖書の『エデンの園』やギリシャ神話の物語も見え隠れしています。しかもその枠組みをそのまま使うのではなく、神話の新たな読み直しがなされているところに、現代のジェンダーの問題に繋がる議論も含んでいます」。

## 「ワールド・カフェ」でアクティブな教養教育を

「ワールド・カフェ」というワークショップ手法がある。いくつかの「カフェ」を設け、それぞれ1つのテーマを掲げている。そこに参加者が立ち寄り、少人数ディスカッションを繰り返すことで、解釈を深めていく方法である。ここでは、金澤先生が実際に「English Workshop」の講座で開催した事例を紹介しよう。

この講座では15回授業の前半で1篇の短編小説を読んだうえで、この「カフェ」が開催されている。そのうち6回は発表形式を基本軸として内容をしっかり理解してもらい、7回目にカフェスタイルの授業を展開するというものだ。発表自体も、回を重ねる度により充実したものになっていったという。

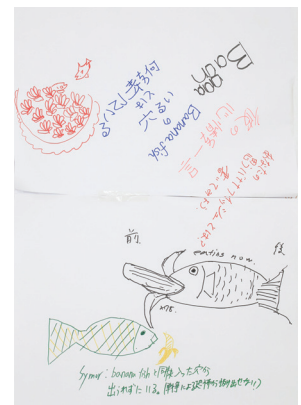
使用されたテキストは『ライ麦畑で捕まえて』で有名な小説家サリンジャーの“A Perfect Day for Bananafish”の英語版原書である。内容は割愛するが、作者の戦争のトラウマや文明批判が根底にあると言われる、意表をつく結末もあり、様々な解釈が可能な短編小説である。

最終回の「カフェ」のために授業は広めの教室を使い、教室内にいくつかの「カフェ」を設けて、それぞれに「店長」がいる。それ以外の学生はいくつかの「カフェ」を回遊してランダムに話し合いを行い、そこでの思いを模造紙に書き残していく。最後にそれらを「店長」たちがまとめて報告するというものだ。集約してみると、「誰が登場人物の中で一番信頼できる人なのか」などのトピックでディスカッションが盛り上がり、様々な成果が報告された。

\*

「ここで学ぶのはみな理系の学生たちです。将来は社会で人々の生活や生命に関わる、責任ある役割を担うことになると思うのです。そのような人たちにこそ、広い視野、柔軟な考え方、自分とは異なる様々な意見があるのだという意識を身につけてほしい、と常々思っているのです。そして、人間とは予測不可能な行動をとる存在なのだということも、文学を通してぜひ考えて欲しいのです」と金澤先生は話してくれた。

太田 正人（ジェイクリエイト）



参加者が画用紙に自由に書き綴った「イメージ」や「思い」の断片